

「メルモ＝ポンジュ往復書簡」

飯田, 伸二
鹿児島国際大学国際文化学部言語コミュニケーション学科

<https://doi.org/10.15017/13235>

出版情報 : Stella. 27, pp.87-89, 2008-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

「メルモ = ポンジュ 往復書簡」

飯 田 伸 二

雑誌『トラ = ジェクトワール』の第4号「アンリ = ルイ・メルモ特集号」に、1945年から61年にかけてポンジュとスイス人出版者メルモが交わした書簡およそ130通が発表された¹⁾。この往復書簡集はポンジュ研究に何をもたらずのだろうか。詩人と出版者のつながりを振り返りながら、いくつかのポイントを整理したい。

1926年にローザンヌで出版社を設立後、20世紀を代表する詩人・作家・画家らと交流し彼らの作品を数多く手がけたメルモは²⁾、45年にポンジュと出会い、翌年に『カーネーション、スズメバチ、ミモザ』を、さらに翌々年には『松林手帖』を出版する。そして52年には、上記作品に「ロワール河の川岸」「一羽の鳥のための覚え書き」「ラ・ムーニース」を加えた『やむにやまれぬ表現の欲求』を刊行した。出版者とのこの出会いは、ポンジュにとり文学的にも物質的にもきわめて貴重な出会いであった。

なぜならポンジュは1942年の『物の味方』刊行後、完成した詩編だけを作品として発表するのではなく、作品の構想・執筆・推敲といった書く行為の全過程をひとつの作品として発表してくれる出版社を探していたからである。だが、作品の生成それ自体を作品の主題とし、生成の過程をつぶさに発表する方法は、文学に何よりも政治参加を求めた大戦後のパリでは容易に受け入れられなかった。じじつ、『12の小品』『物の味方』を手がけたポーランドさえ、ポンジュが取り組んでいた詩的冒険には懐疑的で、ガリマールからの出版を断っていた。

そのような状況のなか、メルモはポンジュの新たな探求に深い理解を示し、経済的にも大きな援助を行った。ポンジュ自身はメルモとの出会いの物質的な側面を強調してきたきらいがあるが、両者の書簡は、メルモがポンジュの作品を愛し、彼の詩人としての才能に終生深い敬意を払っていたことを教えてくれ

る。この往復書簡集がもたらす第一の新知見である。

その一方で、商業的な配慮からメルモは『カーネーション、スズメバチ、ミモザ』と『松林手帖』の在庫が一定数捌けるまで、『やむにやまれぬ表現の欲求』の印刷を延期しようとする。対するボンジュは怒り苛立ち、不信感を募らせていた。こうした出版経緯についてはすでにプレイアド版の編者がボンジュ家に保管されているメルモからの書簡と、同者宛ボンジュ書簡の下書き・写しなどを参照しながら的確に紹介してはいたが、それらの資料が直接引用されることはなかった³⁾。1次資料を提供したこのボンジュ＝メルモ往復書簡集によって詩集出版までの流れがいっそう具体的に把握可能になったのである。とりわけ『やむにやまれぬ表現の欲求』の出版により、『物の味方』だけに依拠した論者たちの偏狭な作品理解（ボンジュ自身の言葉を使えば「誤った解釈」）を一掃し、ひいては自らの営為の革新性をサルトル＝カミュ論争で揺れる文壇・思想界に知らしめることを企図したボンジュにとり、刊行の度重なる遅延がどれほど痛手であったかを生の証言によって知ることができる――

この本の重要性は、すべての作品を集め、問題の序文をつけないとその重要が見えてこないのです。そうすることで、この本は少なくとも『物の味方』と同程度には重要なものとなり、作品を照らすことで私の精神の動きにかんする誤った解釈を防ぐのです。〔…〕

〔…〕たとえば最近カミュの『反抗的人間』が大変な話題になっていますが、この本は私の作品から、とりわけ「ラ・ムーニーヌ」から直接発想をえた（しかも何の断り書きもなしに）箇所があります。この作品はあなたの引き出しに6年間眠っていますが、カミュはこの作品を原稿によって早くも1944年から知っているのです。⁴⁾

とはいえ本往復書簡集は、出版・編集作業や原稿依頼にかかわるものや近況報告のたぐいが多くを占めているのもまた事実である。『やむにやまれぬ表現の欲求』の出版経緯を知るための必須資料であり、メルモがボンジュに対して抱いていた尊敬の念、両者の友情に彩られた交流の機微を知るうえでは貴重にして興味深い資料ではあるが、ボンジュ文学の理解をさらに深め、新たな光をもたらす資料とまでは言えない。これを要するに、出版者メルモはボンジュ文学の最良の理解者にして協力者のひとりではあったが、ポーランのような真の産婆役ではなかったのである。

註

- 1) «Correspondance inédite : Henry-Louis MERMOD / Francis PONGE», édition établie, annotée et présentée par Amaury NAUROY, *Tra-jectoires*, n° 4, juin 2008, pp. 149-310.
- 2) 出版者メルモの仕事の概要はこの雑誌に収められているカタログで知ることができる。Voir Amaury NAUROY, «Catalogue des éditions Mermod», *ibid.*, pp. 315-361.
- 3) 特に以下を参照—— Francis PONGE, *Œuvres complètes*, t. 1, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, p. 1019.
- 4) «La lettre de Francis Ponge à Henry-Louis Mermod» [brouillon, semble-t-il], le 26 novembre 1951, *Tra-jectoires*, n° précité, pp. 240-241. プレイアード版の編者はこの書簡を実際にメルモに送られたものと見なしているが、本往復書簡集を校訂したノーロワは、書簡が下書きのまま送られたかは定かではなく、また下書きの内容を含む書簡がメルモ関連資料に見い出せないことから、投函されたかどうかも定かでないとして述べている。ただ、いずれの場合であれ、『やむにやまれぬ表現の欲求』刊行の遅れに対するボンジュの率直な考えを知るうえで貴重な資料であることに変わりはない。